

[論文]

共感関連反応を規定する要因の検討

——共感性, 心理的重なり, 教示の効果を中心として——

葉山大地

- 〈目次〉
1. 問題と目的
 2. 方法
 3. 結果
 4. 考察

1. 問題と目的

日常生活において、困っている人を見て可哀想だと感じたり、不幸な境遇で悲しむ他者を見ていて自分も悲しい気持ちになることがある。こうした感情反応としては主に同情反応、感情の共有、個人的苦痛が含まれ、心理学においては「共感関連反応 (empathic related response)」と総称される (Eisenberg, Fabes, Bustamante, Mathy, Miller, & Lindholm, 1988)。

共感関連反応はどのようなメカニズムで生起するのであろうか。こうした問いに基づき、1980年代から共感関連反応に関する実証的な研究が盛んになった (Davis, 1983; Davis, Hull, Young, & Warren, 1987; Eisenberg et al., 1988; Eisenberg, Fabes, Schaller, Miller, Carlo, Poulin, Shea, & Shell, 1991)。これらの研究では、音声テープやビデオ映像を実験刺激として、共感関連反応の生起するメカニズムが検討されることが多い。たとえば、Davis (1983) では、交通事故で両親を亡くし、幼い弟妹を育てるために仕事と学業の板挟みにあうカティ (Katie) という女子大学生に関するテープが使用されている。また、Davis et al. (1987) では映画の映像 (“The Brians’s Song”, “The Virginia Woolf”) が使用され、共感的関心や個人的苦痛が測定された。Eisenberg et al. (1988) や Eisenberg et al. (1991) では、二分脊椎 (spina bifida) を患った子どもの映像を使用している。我が国でも、角田 (1992) は、幼稚園児が驚きや寂しさ、喜びを表現する映像を使用し、同情反応などを喚起する実験を行っている。近年では、登張 (2005) が、優等生的な女子中学生がいじめられる内容のドラマ映像を使用して同情反応や並行的共感 (共感対象と同じ感情になること) について検討を行っている。

これらの研究で取り上げられた規定因の代表的なものが、(1) 個人特性としての共感性、(2) 実験者による教示、(3) 心理的重なり、である。1点目の共感性に関しては、たとえば Davis (1983) は、共感性のなかでも特に感情的側面である共感的関心が、同情反応や個人的苦痛を感じる程度を高

める一方、視点取得は共感関連反応に影響を及ぼさないことを示した。2点目の実験者による教示とは、実験者が参加者に対して共感的な感情反応をするように働きかける手続きを指す。たとえば、Davis, Conklin, Smith, & Luce (1996) は、冷静に観察することを求める Observe 条件に加えて、視点取得教示を、共感対象が感じていることを想像させる Image-him 条件と、共感対象の状況に自身が直面したらどう感じるかを想像させる Image-self 条件に分け、心理的重なりへの効果を検討している。3点目の心理的重なりとは、緊密性 (closeness) を測定するものであり、自他の表象の融合を概念化したものである (Aron, Aron, & Smollan, 1992)。登張 (2005) が、共感対象と自己の心理的重なり (Aron et al., 1992) が大きいほど感情反応が高くなることを報告している。

これらの3つの要因を1つのモデルに組み込んだ研究はない。そこで、本研究は、共感関連反応の生起プロセスに関するモデルを検討することを目的とする。本研究で想定するモデルの概略は Figure 1 に示した通りである。

モデル検証に際して具体的に以下の3点を行う。第1に、「感情共有反応」、「シャーデンフロイデ」、「同情反応」、「個人的苦痛」といった共感関連反応を弁別し、幅広く捉えられる項目を作成する。共感性の先行研究では、主として、個人的苦痛、同情反応、感情の共有（並行的共感）が取りあげられているが、Smith, Turner, Garonzik, & Leach (1996) や澤田 (2008) は不

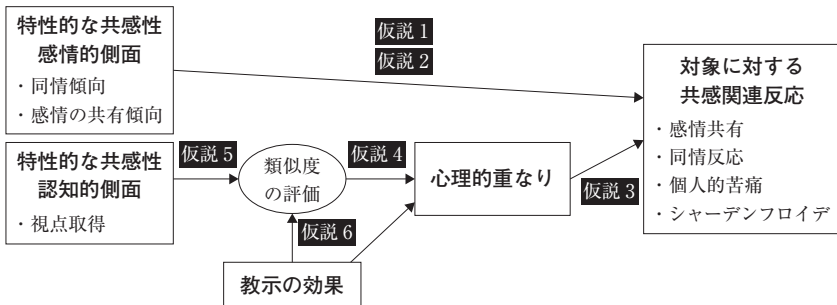


Figure 1 本研究で想定するモデルの概略

幸に陥った他者に対する同情反応とシャーデンフロイデ (*Schadenfreude*) を取り上げている。シャーデンフロイデは他者の不幸を喜ぶ感情であり、同情反応と相反する感情反応である (山本, 2007)。本研究では、こうした感情を含めることで、共感関連反応をより包括的に測定したい。

第2に、個人特性としての共感性が共感関連反応に及ぼす影響を検討する。個人特性としての共感性の測定は、葉山・植村・萩原・大内・及川・鈴木・倉住・櫻井 (2008) の作成した尺度を使用する。

第3に、心理的重なりを規定する要因として (1) 視点取得の過程、(2) 教示の効果の2つをモデルに組み込む。視点取得の過程に関して、Davis (2005) によると大きく自動的に起こる過程と意識的な処理に基づく過程に分けられ、後者はさらに論理的推測 (logical inference)、想像 (imagination)、投影 (projection) という3つに分けられるという。久保・無藤 (1984) は他者の気持ちを理解する過程は投影による過程と投影によらない過程に分けられると論じ、前者は、相手の経験と類似した自分の経験を思い出すことで、自分が過去の経験において感じた情動が想起されると論じた。そうした類似した情動に基づいて他者に注意を向けることで、他者の認識世界について理解 (他者への同化) がなされ、他者の気持ちの理解へ至るという。以上より本研究では、視点取得の過程として、①経験の類似度 (過去に同じ経験をしたことがあるか) や、②性格の類似度 (相手 (少年) の性格が過去の自分の性格と似ていると思うか)、③行動の類似度 (同じ状況であれば同じ行動をするか) を取り上げる。教示の効果については、前述した Davis et al. (1996) と同様に Image-him, Image-self, Observe の3条件を設定する。

次に仮説について述べる。第1に、Davis (1983) や Davis et al. (1987) は、一貫して特性的に他者と感情を共有しやすく、同情を感じやすい個人は、共感対象に対して感情を共有したり、同情反応を生じやすいことを示した。また澤田 (2008) は、シャーデンフロイデと同情反応に負の相関を報告しており、これらの感情反応は、一方が経験されているときは他方は経験されにくいという抑制し合う関係があると考えられる。こうした知見より、

「ネガティブ感情への同情は、ビデオ刺激提示後の同情反応に正の影響を及ぼす一方、シャーデンフロイデに負の影響を及ぼし、ネガティブ感情の共有は、感情共有反応に正の影響を及ぼす」(仮説1)と予測される。

第2に、Eisenberg et al. (1991)は、感情の共有や同情反応の程度が大きくなると、過覚醒 (over arousal) の程度も強くなり、個人的苦痛を感じると論じている。こうした知見より、「ネガティブ感情への同情やネガティブ感情の共有が、個人的苦痛に正の影響を及ぼす」(仮説2)と予測される。

第3に、「心理的重なりから感情共有反応と同情反応、個人的苦痛へ正の影響がみられる一方、シャーデンフロイデに負の影響を及ぼす」(仮説3)と予測される。なぜならば、自分と相手の表象が重なるほど、自分の感情状態から相手の感情などの内面をよりの確に類推することが容易になるためである。さらに、それと同時に、シャーデンフロイデの生起が抑えられると考えられる。また、自他の心理的な重なりが強くなることで過度の同一視によって他者の感情に巻き込まれやすくなることも考えられる。そのため、個人的苦痛への影響も予測に含めた。

次に、心理的重なりの規定因に関する仮説について述べる。Davis (2005)や久保・無藤 (1984)の知見に基づく、「経験の類似度、性格の類似度、行動の類似度は心理的重なりに対して正の影響を及ぼす」(仮説4)と予測される。また、Davis (2005)より、特性的な視点取得が高いと自他両方の視点から自他の比較をしやすく、視点取得の過程を容易になると考えられる。以上より「特性的な視点取得は、経験の類似度、性格の類似度、行動の類似度に対して正の影響を及ぼす」(仮説5)と予測される。

教示の効果に関しては、Davis et al. (1996)から、視点取得教示である Image-him 教示と Image-self 教示は、Observe 教示と比較して視点取得の過程を経る程度が高くなり、各類似度が高く評価される結果、心理的重なりが大きくなると予測される。以上より、Observe 教示を「0」、Image-him 教示と Image-self 教示を合わせて「1」と置き換えてダミー変数化した場合、⁽¹⁾「教示から各類似度、および心理的重なりに正の影響がみられる」(仮説

6) と予測した。

2. 方法

調査参加者

個別調査と集団調査の2種類の実験を行い、大学生132名（男性54名，女性78名）が実験に参加した⁽²⁾。平均年齢は20.58歳（ $SD=1.80$ ）。個別調査は33名（男性18名，女性15名），集団調査は99名（男性36名，女性63名）であった。なお，Image-him 条件は49名，Image-self 条件は43名，Observe 条件は40名であった。

ビデオ刺激

調査に用いるビデオ刺激として，「ぴあフィルムフェスティバル PFF アワード 2004」で入賞した短編フィルムである「382」（久保田裕子監督）を使用した⁽³⁾。このフィルムの具体的な内容は，母子家庭の母親と少年（小学生）に関するものである。長期入院を控えた母親に対して少年は反抗的な態度をとるが，入院直前の母親に髪を切ってもらおう最中に，母親と別れる寂しさに耐えきれず散髪されながら泣いてしまう内容であった。フィルムはノーカットで10分26秒間提示した。

手続き

調査は，個別調査と集団調査を併用した。個別調査では，参加者は実験室でパソコンの前に着席した。集団調査では，参加者は教室に集団（内訳は6名，12名，33名，48名）で着席した。調査者が調査の説明を行い，同意書に記入を求めた。以下の手続きは両調査とも同じである。次に，調査者が教示文を見せて，「ここにビデオを見ていただく際の注意事項が書いてあります。一読して了解していただければ幸いです。チェックボックス欄にチェックをお願い

Table 1 本研究で使用した教示文

Image-him 条件
これから見ていただく映像は、ある少年と母親の物語です。ビデオを見ているときは、 少年の立場に立って、ビデオに登場する少年がどのように感じるかを想像してください。 あなたがビデオを視聴している間、少年がどのように感じるかを思い描いてください。彼がどのように感じるのかに集中して見てください。あなたのすべきことは、ビデオの状況における少年の振る舞いに注意を払い、彼がどのように感じているのかを、できるだけはっきりと想像することです。あなたただっただのように感じるかについては考えないようにして、 少年の気持ちを考えながら ビデオを見てください。
Image-self 条件
これから見ていただく映像は、ある少年と母親の物語です。ビデオを見ているときは、ビデオに登場する 少年が自分だ としたら、 あなたはどのように感じるのか 想像してください。少年に起こる出来事が、 まるで自分が起こったかのように 、思い描いてください。あなたただっただのように感じるのかに集中して見てください。あなたのすべきことは、ビデオの状況において、あなたただっただのように振る舞うかを考え、また、あなたただっただのように感じるのかをできるだけはっきりと想像することです。 少年になりきりながら ビデオを見てください。
Observe 条件
これから見ていただく映像は、ある少年と母親の物語です。ビデオを見ているときは、ビデオに登場する少年の発言や行動を すべて注意深く観察 してください。少年の動きや表情、話し方、声の調子などに注意を払ってください。ビデオに対してできるだけ客観的な視点で見るようにし、 少年に感情移入しないよう心がけて ください。あなたがすべきことは、ビデオをできるだけ客観的に見ることです。少年の気持ちや感じていることは、想像しないようにしてください。 あくまでも客観的に ビデオを見てください。

いします。」と教示し、教示文がきちんと理解できたか確認をした。教示文は Image-him, Image-self, Observe の3条件で (Table 1), ランダムに割り当てた。教示文の確認のチェック後、個別調査の場合はパソコンに映像を流し、集団調査の場合は、教室内のスクリーンにビデオ映像を流した。ビデオ刺激の視聴後、調査者は参加者のところへ戻り、質問紙に回答するよう求めた。

質問紙

1) 共感関連反応項目

ビデオ視聴後の共感関連反応を測定するために、以下の4つの感情反応に関する項目を作成した。回答は「全く感じなかった(1)」～「とても感じ

た(5)」の5件法であった。

同情反応 同情反応は、少年に対してかわいそうという気持ちや同情を感じることを指す。Davis (1983), Eisenberg (1991), 登張 (2005), 澤田 (2008) を参考に、「少年を見て、同情した」等の5項目を用意した。

シャーデンフロイデ シャーデンフロイデは、悲しそうな少年を見て、楽しいといったポジティブな感情が生起することを指す、非共感的な感情反応である。澤田 (2008) を参考に、「少年を見て、うれしくなった」、「少年を見て、愉快だった」等の5項目を用意した。

個人的苦痛 個人的苦痛は、ビデオを視聴することによって、ネガティブな感情が強く生起し、その感情に飲み込まれることを指す、自己志向的な反応である。項目は、Davis (1983), 登張 (2005) を参考にして、「少年を見て、動揺した」、「少年を見て、混乱した」等の5項目を用意した。

感情共有反応 少年と同じ感情を自分自身も感じることを指すものである。少年の感情を客観的に把握する必要があるため、ビデオ刺激を視聴して、少年が感じていると考えられる感情を筆者らがそれぞれリストアップし、代表的な感情として、「寂しい」、「悲しい」、「落ち込んだ」、等を選んだ。項目は「少年を見て、少年と同じように不安になった」等の5項目を用意した。

2) 少年との類似度に関する項目

経験の類似度 ビデオに登場する少年と同じ年頃だった時に、生活環境や経験が少年と同様であったかを尋ねた（「母親が長期間不在だったことがある」、「母親に、自分の机の周りを勝手に掃除されたことがある」等の7項目）。「はい」、「いいえ」で回答を求めた。

性格の類似度 調査参加者がビデオに登場する少年と同じ年頃だった時の性格と少年の性格との類似度について尋ねた（「少年は自分が子どもだったころの性格と似ている」の1項目）。回答は「まったく当てはまらない(1)」～「とても当てはまる(5)」の5件法。

行動の類似度 調査参加者が少年と同じ年頃に、少年と同じ境遇にあったとして、少年の行動とどれくらい似た行動を取るかを尋ねた（「母親が不在になるとしたら、少年と同じように、自分も泣いてしまう」、「自分が少年だったら、母親とケンカした時、同じように口を利かなくなると思う」等の3項目）。回答は「まったく当てはまらない（1）」～「とても当てはまる（5）」の5件法。

3) 心理的重なり尺度

Aron, et al. (1992) の開発した尺度を登張 (2005) が修正した尺度を用いた。この尺度は自己と他者の表象の重なり具合を2つの円の重なり具合で示したものである。8つの図から、自分とビデオに登場する少年との関係を最もよく表すものを1つ選んでもらった。

4) 教示に従えた程度に関する項目

ビデオ刺激を視聴する際に提示した教示文の指示を意識できていたかを尋ねるため、条件ごとに以下の質問に答えてもらった。Image-him 条件は「少年の立場に立って、少年の気持ちを考えながら、映像をみることができた」、Image-self 条件は「少年が自分だと想像して、少年になりきりながら、映像を見ることができた」、Observe 条件は「ビデオを注意深く見て、内容を記憶することができた」という質問をそれぞれ行った。回答は、「まったく当てはまらない（1）」～「とても当てはまる（5）」の5件法であった。

5) 個人特性に関する尺度

共感性 葉山ら (2008) の共感性プロセス尺度を使用した。この尺度は認知的側面と感情的側面から構成され、感情的側面は、櫻井・葉山・鈴木・倉住・萩原・鈴木・大内・及川 (2011) で修正が加えられている。回答は、「まったく当てはまらない（1）」～「とても当てはまる（5）」の5件法で

あった。

3. 結果

共感関連反応を測定する項目の因子構造の確認 共感関連反応に関して因子分析（主因子法・promax 回転）を行った結果，固有値（5.88, 3.10, 1.73, 1.70, 0.88…）の減衰から4因子解が最適と判断された。（Table 2）。第1因子は他者の感情と同じ感情を感じたことを示す項目が負荷したため，「感情共有反応」と命名した。第2因子はビデオに登場する少年に対して快感情を感じたことを示す項目が負荷したため，「シャーデンフロイデ」と命名した。第3因子は，他者を観察したことで自分に生じた動揺や混乱などの不快な感情に関する項目が負荷したため，「個人的苦痛」と命名した。第4因子は，他者への同情や関心に関する感情をどの程度感じたかを示す項目が負荷したため，「同情反応」と命名した。

共感関連反応の下位尺度の基礎統計量 共感関連反応の各因子に高い負荷を示した項目の得点を合算し項目数で除したものを下位尺度得点とした（Table 3）。 α 係数は， $\alpha = .74 \sim .89$ となった。次に，各下位尺度間の相関を算出したところ，感情共有反応が同情反応および個人的苦痛と中程度の正の相関を示した（Table 4）。

また，シャーデンフロイデは感情共有反応と同情反応と負の相関を示した。次に，共感関連反応に関して t 検定を用いて男女差の確認をしたところ，すべての下位尺度得点で有意な差はみられなかった。

教示文に従えた程度 ビデオを視聴する際にどのくらい教示文の指示に従えたかを明らかにするために，当該項目への回答に不備があった6名を除外し，126名のデータを用いて平均値および標準偏差を算出した。その結果，Image-self 条件が4.17点（ $SD=0.83$ ），Image-him 条件が3.51点（ $SD=1.08$ ），Observe 条件が3.83点（ $SD=0.84$ ）となった。各得点について，理論的中間点（3.00点）を基準とした一標本の t 検定を行った結果，Image-self 条件

Table 2 共感関連反応に関する因子分析結果
(主因子法, promax 回転後の因子パターン)

項目	因子				
	1	2	3	4	
第1因子：感情の共有					
少年を見て，少年と同じように寂しさを感じた.	.87	.08	-.09	.00	
少年を見て，少年と同じように悲しさを感じた.	.82	-.03	-.26	.15	
少年を見て，少年と同じように不安になった.	.79	.04	.24	-.14	
少年を見て，少年と同じように心細く感じた.	.78	-.07	.05	-.11	
少年を見て，少年と同じように落ち込んだ.	.42	-.01	.35	.13	
第2因子：シャーデンフロイデ					
少年を見て，うれしくなった.	.21	.87	-.16	-.06	
少年を見て，いい気分になった.	.05	.78	-.04	.03	
少年を見て，愉快だった.	-.01	.73	.10	-.02	
少年を見て，楽しくなった.	-.26	.70	.16	.17	
少年を見て，いい気味だと感じた.	-.03	.48	.02	-.14	
第3因子：個人的苦痛					
少年を見て，どうしたらいいか分からなくなった.	-.02	-.06	.79	-.18	
少年を見て，苦痛を感じた.	.06	.02	.66	.10	
少年を見て，混乱した.	-.19	.12	.64	.01	
少年を見て，動揺した.	.25	-.02	.55	.08	
第4因子：同情的反応					
少年を見て，かわいそうだと感じた.	.07	-.05	-.22	.77	
少年を見て，不憫だと感じた.	-.18	-.05	.04	.65	
少年を見て，気の毒だと感じた.	-.04	.08	.05	.62	
少年を見て，同情した.	.11	.05	.04	.59	
少年を見て，心配になった.	.18	-.10	.31	.35	
因子間相関	F 1	—	-.22	.45	.47
	F 2		—	-.01	-.30
	F 3			—	.32
	F 4				—

Table 3 共感関連反応および類似度, 心理的重なり基礎統計量

	α 係数	全体 平均 (SD)	男性 平均 (SD)	女性 平均 (SD)	t 値 ($df = 130$)
感情共有反応	0.87	3.62 (1.04)	3.46 (1.12)	3.72 (0.97)	1.45 <i>n.s.</i>
シャーデンフロイデ	0.83	1.33 (0.60)	1.39 (0.64)	1.29 (0.57)	0.92 <i>n.s.</i>
同情反応	0.76	3.55 (0.84)	3.50 (0.78)	3.59 (0.89)	0.37 <i>n.s.</i>
個人的苦痛	0.77	2.57 (0.82)	2.47 (0.89)	2.64 (0.76)	1.19 <i>n.s.</i>
経験の類似度	—	4.20 (1.43)	4.26 (1.36)	4.15 (1.49)	0.41 <i>n.s.</i>
性格の類似度	—	2.73 (1.12)	2.76 (1.20)	2.72 (1.07)	0.21 <i>n.s.</i>
行動の類似度	0.62	3.75 (0.91)	3.60 (0.96)	3.85 (0.87)	1.55 <i>n.s.</i>
心理的重なり	—	3.66 (1.59)	3.72 (1.66)	3.62 (1.54)	0.38 <i>n.s.</i>

Table 4 本研究で用いた各変数の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
① 感情共有反応	—	-.16	.37**	.53**	.39**	.35**	.52**	.17	.41**	.53**	.56**
② シャーデンフロイデ		—	-.20*	-.01	-.20*	-.32**	-.15	-.11	-.12	-.16	-.10
③ 同情反応			—	.32**	.28**	.59**	.32**	.06	.23**	.41**	.33**
④ 個人的苦痛				—	.30**	.28**	.34**	.14	.11	.31**	.24**
⑤ ネガ感情の共有					—	.59**	.66**	.12	.14	.38**	.10
⑥ ネガ感情への同情						—	.56**	.24**	.18*	.39**	.25**
⑦ 視点取得							—	.23**	.29**	.43**	.23**
⑧ 経験の類似度								—	.18*	.23**	.20*
⑨ 性格の類似度									—	.39**	.53**
⑩ 行動の類似度										—	.53**
⑪ 心理的重なり											—

* $p < .05$, ** $p < .01$

($t_{(47)} = 9.70, p < .01$), Image-him 条件 ($t_{(40)} = 3.05, p < .01$), Observe 条件 ($t_{(36)} = 5.30, p < .01$) ですべて有意になった。

共感関連反応の生起プロセスのモデル検証 共感関連反応が生起するプロセスを検証するため, 構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った (Figure 2)。その際, 潜在変数を設定しないモデルを用いた。パス解析の結

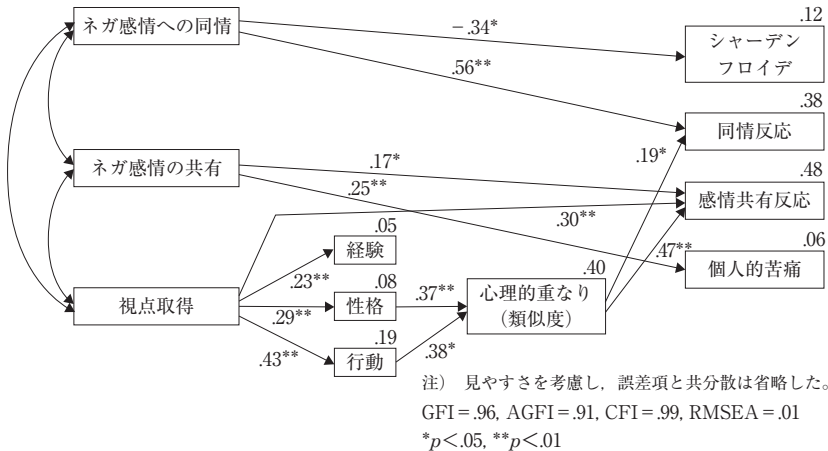


Figure 2 共感関連反応の生起プロセスのモデル

果、適合度は $\chi^2 = 31.23 (p > .05)$, $df = 31$, GFI = .96, AGFI = .91, CFI = .99, RMSEA = .01 となり、モデルはデータに適合していると判断された。

共感性から共感関連反応へのパスにおいて、ネガティブ感情への同情からシャーデンフロイデに有意な負のパスがみられた一方、同情反応に有意な正のパスがみられた。また、ネガティブ感情の共有から感情共有反応と個人的苦痛に有意な正のパスがみられた。しかし、ネガティブ感情の共有からシャーデンフロイデへ負のパスはみられなかった。さらに、探索的にモデルを拡張したところ、視点取得から感情共有反応に有意な正のパスがみられた。次に、心理的重なりへ及ぼす影響に関して、特性的な視点取得から、経験の類似、性格の類似、行動の類似へ有意な正のパスがみられた。性格の類似と行動の類似から心理的重なりへ有意な正のパスがみられた。最後に、心理的重なりから同情反応および感情共有反応へ有意な正のパスがみられた。

教示の効果に関する補足的な検討 3種類の教示によって各変数の得点に相違がみられるかを検討するため、心理的重なり、類似度および共感関連反応を従属変数とした分散分析を行った。その結果、どの変数も教示条件による効果はみられなかった。

4. 考察

本研究の目的は、共感関連反応の生起プロセスに関するモデルを、ビデオ刺激に対する感情反応を回答してもらうことを通して検討することであった。

各仮説の支持・不支持について考察を行う。まず、特性的な共感性であるネガティブ感情への同情が同情反応を促進し、ネガティブ感情の共有が感情共有反応を促進しシャーデンフロイデを抑制したことから、仮説1は支持された。特性的に同情を感じやすいほど、シャーデンフロイデが感じにくくなることが実証的に示された。仮説2に関しては、ネガティブ感情への同情からパスがみられなかったものの、ネガティブ感情の共有が個人的苦痛へ正のパスがみられたという結果から、部分的に支持された。

心理的重なりが共感関連反応に及ぼす影響を検討した結果、個人的苦痛に対するパスが有意にならなかったものの、感情共有反応と同情反応への正のパスを示し、仮説3は部分的に支持された。共感対象と自己の心理的重なりが大きいほど、共感関連反応の程度が大きくなることが示唆された。この結果は登張（2005）と一致する。

心理的重なりの規定因に関して、行動の類似度と性格の類似度から心理的重なりに正のパスが示され、仮説4もおおむね支持された。同じ性格であると推測されると自他の表象が重なっていると判断されるという結果は、久保・無藤（1984）の知見と合致する。また、同じ行動をすると推測されることで自他の表象が重なりやすくなる結果はDavis（2005）と一致する。

視点取得が、共感対象に対する類似度の評価にそれぞれ正のパスを示し、仮説5は支持された。やはり、視点取得できる程度が高いほど、自己の情報に基づいて自己と相手が似ているという評価が行われやすくなるといえる。その一方で、探索的にモデル拡張をした結果、視点取得から感情共有反応に直接的なパスもみられた。視点取得できる程度が高ければ、相手との心理的

重なりが低い場合でも、感情を共有することが可能かもしれない。

教示の効果に関しては、モデル検証において、心理的重なりや類似度へ正のパスがみられず、仮説6は支持されなかった。補足的に行った教示の条件間比較の分析でも有意な差がみられなかった。こうした結果から教示は効果がないと判断するのは性急であろう。たとえば、Image-him 条件は教示に従えた程度に関する得点が高他の教示と比べてやや低かったことから、教示がうまく作用せず、良好な結果が得られなかった可能性がある。

本研究の結果が有する意義について以下に述べる。第1に、「ネガティブ感情への同情」と「ネガティブ感情の共有」が弁別的な結果を示した点である。先行研究 (Davis, 1983; 登張, 2005) などでは「共感的関心」として同一の下位尺度に含まれることが多いが、こうした特性的な共感性が有する独自の効果を検討できた点は興味深い。第2に、共感関連反応が心理的重なりによっても規定されることが改めて示された。この点は先行研究 (登張, 2005) の知見が頑健であることを示した点で示唆に富むといえる。特に、共感性との関係についても興味深い結果が得られた。たとえば、パス解析より、同情反応は特性的な同情のしやすさの影響が中程度であり、心理的重なりの影響が弱かった。こうした点から、同情反応は自分と相手が似ていると判断される程度に左右されづらいことが示された。

本研究にはさらに検討すべき点も残されている。以下に3点述べる。1点目は、実験手続きの改善である。まず、教示に従えた程度の得点がやや低かった Image-him 教示の文章が適切ではなかった可能性があり、改善が望まれる。教示文は、Davis et al. (1996) に準拠したが、平易な表現に修正することも必要である。2点目は、共感関連反応を自己報告で測定する方法も改善が必要である。心拍数や皮膚電位反応などの生理指標を測定している試みもあるため (Eisenberg, et al., 1994; 角田, 1992), こうした測度の導入も望まれる。3点目は、共感関連反応が援助行動へ及ぼす影響を実験的に検討する必要がある。近年、援助 (募金) を必要とする被災者や病者 (たとえば HIV 患者) を紹介するフィルムが各種 NPO 団体で作成されている。こうした刺激

を用いることも有効であろう。

〔注〕

- (1) 教示の条件をダミー変数化する手続きは Davis et al. (1987) でも用いられている。本研究においては、視点取得条件を2つに分けて効果が異なることを前提としているが、共に相手の立場をイメージするという視点取得を促すという点で共通した特徴を持ち、効果の優劣の判定ができない。そのため、ダミー変数化することで2つの条件の効果の違いが不明瞭になるという欠点があるが、上記の手続きを用いることとした。
- (2) 個別調査と集団調査という形式の相違が結果に影響しているかを確認するため、各変数について t 検定を行った。その結果、研究で扱っていないポジティブ感情への好感・共有に有意傾向の差がみられたものの ($t(130) = 1.70, p < .10$)、本研究に直接関係する変数では、有意差はみられなかった。また、各変数間の相関係数も個別調査と集団調査でほぼ同様であった。以上から、調査の違いによる影響は大きくないと判断された。
- (3) このフィルムを刺激として選んだ理由は、10分ほどで完結するため編集が不要であり、少年の状況や心情の変化が理解しやすいと判断されたためである。映像の使用については製作者の了解を得ている。

〔引用文献〕

- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Davis, M.H. (1983). The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, **51**, 167-184.
- Davis, M. H. (2005). A "constituent" approach to the study of perspective taking: What are its fundamental elements? In Hodges, S.D. & B.F. Malle (Eds.), *Other minds: How humans bridge the divide between self and others* (pp. 44-55). New York, US: Guilford Press.
- Davis, M.H., Hull, J.G., Young, R.D., & Warren, G. G. (1987). Emotional reactions to dramatic film stimuli: The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 126-133.
- Davis, M.H., Conklin L., Smith, A., & Luce, C. (1996). Effects of perspective

- taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 713-726.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Bustamante, D., Mathy, R.M., Miller, P., & Lindholm, E. (1988). Differentiation of vicariously induced emotional reactions in children. *Developmental Psychology*, **24**, 237-246.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Schaller, M., Miller, P., Carlo, G., Poulin, R., Shea, C., & Shell, R. (1991). Personality and socialization correlates of vicarious emotional responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 459-470.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性プロセス尺度の試み, 筑波大学心理学研究, **36**, 39-48.
- 角田豊 (1992). 共感経験尺度 (EES) の妥当性—VTR を刺激とした感情内容別検討一, 教育心理学研究, **40**, 178-184.
- 久保ゆかり・無藤隆 (1984). 気持ちの理解における類似経験の想起の効果—共感的理解の発達の検討一, 教育心理学研究, **32**, 296-305.
- 澤田匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響: 一罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して一, 感情心理学研究, **16**, 36-48.
- Smith, R. H., Turner, T.J., Garonzik, R., Leach, C.M. (1996). Envy and Schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 158-168.
- 登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情的結果. 特性共感の関係—性の類似度, 心理的重なりの効果, パーソナリティ研究, **13**, 143-155.
- 櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・鈴木みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係. 心理学研究, **82**, 123-131.
- 山本良子 (2007). 他者の不幸を悲しむ情動, 喜ぶ情動: 面接調査から把握されたその実態. 京都大学院教育学研究科紀要, **53**, 273-285.